

本書はⅠ章に、書き下ろしの「言葉と戦争」をまとめて載せてある。たいへん重たい箇所となったことをお詫びする。

戦争の起源と、その現在と、今後のわれわれが何をしなければならぬかという、目ごろだれもが知りたいと思ひ、なかなか解答を得られない内容について、言葉にたずさわる者としての責任の限りにおいて、道すじを何とかつけようとしている。この箇所を、広く読まれたいとつよく念願する。それとともに、文体は、もしかしたら高校生諸君の読書対象になってくれてもよいと思つて、かれらに語りかけるような心で書いた。

私は五十歳台の前半というときに『湾岸戦争論』（河出書房新社、一九九四）を書いた。それを書きながら、戦争の起源やその不可避性、あるいは回避可能性の根拠について、ちゃんと論じてある、参考となる（痒いところに手がとどくような）本がほしいと、切実に考えた。ちゃんと論じてあるような本と言っても、実戦的な戦争論とか、現状分析のしっかりした本とかいうのでなく（それはそれらでいいけど）、真にほしいのは平和社会としての環境を起源から探求する前提で書かれる冷静な本、というような意味合いである。

Ⅱ章は「教科書、戦争、表現」を軸にして、湾岸戦争後の〈空白〉に向かつてなだれ込んでく

る、ある種のいやな気体についての分析を試みた。「詩のするしごと」「日本語の境域」もまた考えつづけなければならぬ課題への挑戦である。

Ⅲ章はハルオ・シラネさん（コロンビア大学教授、日本文学）との、メール交換による対談と言ったらよいか、ほかにあまりない試みだろう。その方法としては二通ずつ送り、五回やりとりして終えた。いつも斬新なアイデアをしかもすぐに実行する、『國文學』（學燈社）の牧野十寸穂さんによる企画だった。シラネさんと私と、各地を飛びまわる浮遊感覚のうちに、世界の危機から文学研究の危機までを一望させてみせた。自分で言うのも何ながら、ここに投げ出された問題は今後を占うに足る新しさでいっぱいである。シラネさん、牧野さん、ありがとうございます。

そして「物語問題片」をこのメール交換のあとに置くことにした。四部分から成る。「物語は解き明かされたか」は湾岸戦争以後での、〈大きな物語〉ということについて考えようとしている（『琉球新報』掲載）。一九九四年の執筆だから、本書『言葉と戦争』に至るまでの私の思考のいわば起点となった小片。物語論でもある。

「シ（ー）ディ（ー）カ」の意味はCD化ということだろうが、正確には忘れた。9・11（アメリカ同時多発テロ事件）のすぐあと成田を発って、新疆地方で書き始めた。メールという文体に自分は馴染んでゆけるのか、そんな今後の不安があった。

そのなかでの「チェーン」は回文詩で、火種工場の富山妙子氏のイベント（三軒茶屋キャロットタワー）での朗読のために作成し、一週間後、『読売新聞』紙上に発表した。日付けの十月八日はアフガン攻撃の報道に接しての翌日のはずだから、一晩で書いた勘定である。アメリカ政府に攻撃をやめさせようという、反戦のアピールがチェーン・メールのかたちで地球をぐるぐる回っていたこ

ろで、そのイメージを借りて回文で私もぐるっと一卷きしてみせた。作品「チェーン」は『神の子犬』（書肆山田、二〇〇四）にも載せてある。

「ほんとうの物語敗北史とは」には、「涙は、止まるか？」という、あるサイトからの引用を採録してある。機械の不具合から、名前をはじめとせずたの引用である。

「ほんの二〇分まえ、イラクが戦争を中止するというニュースがあった」は、現実起こってしまふアフガン報復をあいてに、それを湾岸戦争と意図的に混線させてある。既視感を利用する試み。「ほんの二〇分まえ……」という題名は竹田英尚氏の書物から取り出したフレーズで、攻撃を一刻も早く終わりにさせようとする意志が込められる。

V章は古い（掲載誌不明の）「戦争責任論争と問題点」を筆頭に、あるシンポジウムでの発言記録「思想は騙るか」、同人誌に出した「フィリピン史研究者」、思い立って書いた「大地の幻に對す——あるいは日本一九三六〜四〇年代戦争と読者」と「時代の写し絵——同（続）」と、それに「日本社会の（うたとは何か）」から成る。それらのなか、「フィリピン史研究者」は『レイテ戦記』をめぐる池端雪浦氏（東京外国語大学A A 教授）へのインタヴューを、テレビの番組から聞き書きするという試みで、ある種、著作権違反であるけれども、事後に池端氏の了諾をいただいた。この番組にもう二度と出会うことはあるまい。そのはずだったのに、なんと『境界領域への旅』の）新原道信氏からDVDを提供され、聞き直して意味不明だった箇所をいくつも訂正することができた（新原さん、ありがとう）。『藍・BLUE』は劉燕子さんが中国／日本の架け橋たらんとして創刊した貴重な文芸誌。

VI章はコラムのセッションで、めったに振り返ることのないはずの私の戦後へのフラッシュバック

クといったところ。

戦争を論じるにはいろいろな困難が伴うことだろう。行論上の必要な資料や、先行文献にうまく出会わなければならない、いくら書いても書いても戦争という怪物を掬う手から取りこぼしてしまふ。しかも現代に見る数多い出版物に一通り広く目を通して、われわれの時代の戦争の捉え方を共有しなければ、独り合点に終わろう。『現代思想』がらみで言えば、本文にふれることのできなかった二〇〇二年一月号（ポール・ヴィリリオの特集号）もあれば、「総特集・イラク戦争」（二〇〇三年四月号）というのもあって、いままお戦争に関する私の書物漁りが終わらないのはつらい。

『古事記』『日本書紀』または『平家物語』などに〈戦争〉があふれかえる日本古典文学であるけれども、反面に『源氏物語』のような物語文学や、女性たちの文学生活の極微ごくみの描写、抗争をきらい魂の平安を求める隠者たちの文学など、非武装を核心とする思想もまたつよく息づいていた。旧仏教は僧兵を擁して武乱をこととしたとしても、たかが知れている。鎌倉時代の新仏教や民衆へのいろんな宗派の布教活動は、かれらが兵乱の時代とさまざまに妥協し、あるいは国防を熱く説いたかもしれないしろ、かれら自身は非武装に終始していた。人間のからだは自衛するから、個人に立ち返り一刀を腰差するぐらいの〈武装〉なら当然のことではかない。非武装とはそういうことでない。思想としてのそのことであり、武力に荷担せずという意味でなら文字通り中立だった。一見、ふにやふにやして、矛盾した思想のように見えても、長くつづいたこの風土をつらぬく非武装の一念は精神的な伝統文化になっていったろう。それはまぎれもなく世界の反戦や非戦の歴史の一環である。非武装という人類史の成果をいまに評価できなくなり、その灯を絶やしてしまうならあとがなくなる。

私の三歳から十二歳にかけては昭和二十年代（一九四五～五四）である。本書に何回かふれてきたことながら、昭和三十年代になると世の教育関係者たちが、ことあるごとに昭和二十年代の教育を、なつてなかつた、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の押しつけだったと、くさすようになつて、日本社会が昭和三十年代、四十年代と、どんどん（墮落）してゆくかのように見えるにつけて、かれらは昭和二十年代が（めっちゃくちゃ）だったことに責任をなすりつけるようになり、目のかたきにして、ひいては憲法改正の論調へとかきねてゆく人もいる。戦争未亡人の子息で私はなかつたが、その世代である。私の母が生前のあるとき、私の書いた沖繩論の何かを読んだらしく、思い出したように、沖繩女子師範に赴任することが決まっていたと洩らしたことがある。本書に書いたように私の父がジャカルタでの抑留から帰国、復員したのは一九四六年だった。

私の世代は戦後の絶対平和社会幻想のシャワーを頭から浴びている。大人たちが、教師たちが、将来社会をわれわれに託して、だいに、たいせつにしてくれた。なのにまったく何の恩返しもしていないとは、私だけでなく同窓のあつまりなどで聞く慨嘆である。

戦争責任が、終戦時に乳幼児だったわが世代や、さらには戦後生まれ（団塊の世代など、つまり定義するなら父親が戦死できなかった子供たち）に、果たしてあるのだろうか。これはむずかしい課題だ。家永三郎氏の『戦争責任』（一九八五序、岩波現代文庫、二〇〇二）によれば、戦争を知らない世代にも責任があるということになる。しかしそれだと暴論と云うほかならう。氏によれば世代を異にしても、同じ日本人として連続性があるのだからという理屈。それでは日本人を前提に立てた民族の論理であつて、結局は戦争遂行の理屈の裏返しということにならないか。戦後派はとりあえず無垢に生まれた。無責任を標榜してどこかに疚やましきがあるうか。いや、長じてたしかに責任を自

覚しよう（だれもがでなくとも）。場合によっては学習や教育の効果により責任体制を選択し返す。日本人としての日中戦争や太平洋戦争をでなく、人間性の名において戦争したいの責任を選択し返すのでなければ、より若い世代として何をやっているのかと、さらなる後続の世代から非難される今後となろう。

再掲載の許可をたまわった各紙誌、出版社の各位に感謝し申し上げます。

大月書店の西浩孝氏と最初に打ち合わせたのは四月二十五日で、示された大まかな構成案をもとに書き出したのがおよそ五月五日、書き下ろし部分を三パーツに分けて断続的に執筆しすすめ、ようやくトンネルをぬけ出た日、つまり脱稿と言える状態にはいったのが七月二十七日。まことに倉卒のかんに走り切ったような執筆ながら、けっして〈戦争〉に明け暮れたわけでなく、あくまで日常の時間へとって返して冷静に書き綴った。

二〇〇七年（平成十九）九月十八日

藤井貞和

第二次世界大戦（太平洋戦争を含む）はまったく要らざる無益な戦争であり、それにもかかわらず数千万という死者の数を産んだ。もし、世界史から、第二次世界大戦を取り除いてしまえるならば、第一次世界大戦の終わりから〈戦争の抛棄（放棄）〉が成熟して、二十世紀の後半を迎える流れが見えてくる。

第一次世界大戦と第二次世界大戦とのあいだに、世界大戦を「悪」とし、戦争を放棄するという考え方が生じて、国際条約の締結に至る。日本国では一九三〇年代の大陸政策や満州国建設に対し、陰に陽に影響を与えつつ、それらがあるとときから、ないがしろにするかのようにして日中戦争、太平洋戦争という途に向かう。

前線では激戦を含む戦争状態を取りつつ、植民地などの内部において大東亜共栄圏といった〈平和〉をたてまえとしながら、〈パリ不戦〉と抵触しない模索なんか、どこに活路を見いださうこととだろうか。「文学の言葉」と「非戦の言葉」（佐倉市国際文化大学講演）のさいごにふれることになった『逆転の大戦争史』には、「戦争はこうして違法化された」（第五章）、しかし「日本は旧世界秩序を学んだ」（第六章）と、端的に描かれる。

つまり、第一次世界大戦の多くの犠牲者が人類に考察を促して、パリ不戦条約を促したにもかか

わらず、日本国はペリーの砲艦外交で旧世界秩序を学んだあと、それを朝鮮併合に利用する。日清・日ロ戦争と、大陸に進出した日本国は、パリ不戦条約の精神を揺さぶることになる、と『逆転の大戦争史』は論じる。パリ不戦条約に署名したにもかかわらず、それを無視して満州国を建てたと言う。「新世界秩序」を奉ずる国々は日本国に対する石油の禁輸など、経済制裁でそれに応じた、と。

本土空襲、沖縄の戦場化、原子爆弾の投下という惨害のあと、日本国の戦後は真に平和を求めることとなった、と私には思える。世代的には最初期の平和探索期に物心がついて、しかし私は朝鮮戦争、再軍備を目の当たりにしつつ長じた年齢としてある。

一九八九年の冷戦崩壊から一九九一年の湾岸戦争へと、危機はつづく。『湾岸戦争論』（河出書房新社、一九九四）を私は著して、これは回し読みされた。ある戦争反対の文学者集會に、詩の書き手が一人も含まれていないことに反発したのが執筆のきっかけだが、各種の研究會や特集からはきかんに意見がもたらされた（二〇二〇・二・九には国際日本文化センターで研究集會が持たれた）。冷戦の終わりを見ることなく鮎川信夫は亡くなったので、何となくその後を辿りすめた感がある。

一九九四年の『琉球新報』（二〇・二三）に私は「物語は解き明かされたか」を寄稿して、物語論として戦争を取りあつかうように（不完全ながら）問題提起した（本書所収）。〈戦争をやめさせるために反戦という戦争は許されるか〉という、むずかしいパズルを物語と見なして、戦争学はこのパズルを解くことにより戦争廃絶へ一步を進めることができる、というような理屈である。物語といえば戦争で満たされるかのように、まるでアニメ的傾向をおおるかのごとく誤解されたが、真意は逆で、戦争をやめさせる方途に私の商売道具である「物語論」を動員しようとするところにあった

（私の古くからのし）とは『源氏物語』論）。

文学にひそむ〈戦争〉について、西浩孝氏の慇懃もあって、長文「言葉と戦争」をしたためた。それを柱として、『言葉と戦争』（大月書店、二〇〇七）はまとめられた。歴史上の〈戦争〉は五千年という歳月を有して、人類学の対象でもあった。

一八〇ページに書いた大江さんの講演について補足する。その会場に参加して、直接聴いた一女性作家から私は知らされて、興味のおもむくままに綴った。『言葉と戦争』（大月書店版）を読まれた大江さんから、あれはあくまでヨタ話であると、注意するハガキをいただいた。私もけっして俳句を貶める話の成り行きではないと言明しておきたい。

二〇一八年十一月には『非戦へ——物語平和論』が、長崎に拠点を移した西氏の出版機構（編集室水平線）から刊行された。「戦争」のこと——解説に代えて」（桑原茂夫）を含み、〈戦争とは何か〉を、虐殺、掠奪（略奪）、そして凌辱という、対等にならぶ三方向から定義し返した書き下ろしの「戦争から憲法へ」で、〈パリ不戦〉を深めることができ、もって矛を納めようと決意した。題名を「物語平和論」にしようかと迷って、これは副題にした。

二〇二〇年九月に佐倉市国際文化大学で、「文学の言葉」と「非戦の文学」を発表し、それは令和二年度講義録（二〇二一・三）にまとめられるとともに、ここに大きく改稿して、今回の『言葉と戦争』新版に増補として収録する。発表ではネットから平野三郎文書を取り出し、資料として配付するなどした。

二〇二二年になつての「黒雲」考（『ユリイカ』五月号）は、何だか草稿状態のやや長い一篇である。世界大戦ののこり火か、付け火かのような戦争形態であり、戦争が廃絶されない限りつづ

く、人類の悲劇はなさない。(戦争とは何か)を定義し切るならば、人類はそれをつづけるか、百年後、二百年後にそれを止めることになるか、決定を迫られることとなろう。

西浩孝氏とは、大月書店版『言葉と戦争』、そして『水素よ、炉心露出の詩——三月十一日のために』(桑原茂夫解説、大月書店、二〇一三)以来で、『非戦へ』につづき、『言葉と戦争』増補新版が成る。限らない謝意、そして今後の発展を祈りつつ。

二〇二三年(令和五)十月十日

藤井貞和